

2002年9月8日

殺してはいけない

[聖書]申命記5章17節

5:17 殺してはならない。

マタイによる福音書5章21～26節

5:21 「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。5:22 しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。5:23 だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、5:24 その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。5:25 あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。5:26 はっきり言うておく。最後のクアドラントを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

ヨハネの手紙一 3章15節

3:15 兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおり、すべて人殺しには永遠の命がとどまっています。

ローマの信徒への手紙 12章19～21節

12:19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。12:20 「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」12:21 悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

[序]毎日大勢の人が殺されている現実

今日学ぶ戒めは「殺してはならない」です。人を殺すなど一番重い罪だ、当然守るべき戒めで常識ではないかと、誰も思います。でも皆さん、この世では何と多くの人が毎日殺されているでしょうか。洪水や地震や早魃などの自然災害、そして戦争、犯罪や事故、自殺者も非常に多くなっています。人間の命はかけがいがなく尊いと言われますが、どうしてこう大勢の人の命が殺されているのでしょうか。聖書を信じているユダヤ教・キリスト教の世界でもそうなのです。

そればかりではありません。聖書にも死刑の記事が沢山あります。「殺してはならない」という戒めを含む十戒をモーセは神さまから頂いて山から下りて来たのに、人々が金の子牛を造ってどんちゃん騒ぎをしているのを見た時、レビの子らに「兄弟、友、隣人を殺せ」と命じて3000人を殺しています(出エジプト32:27)。神さまは「安息日を守らない者は必ず死刑に処せられる」とおっしゃり(31:14)、安息日に薪を拾い集めた者が死刑になりました(民数記15:36)。こう言う記事と「殺してはならない」とどう結び合わせて考えたらよいのでしょうか。

単純なようでいざよく考えてみると、奥が深い戒めが第六の戒めです。

[1]隠れた殺人を自覚する

さて今回調べてみて分かったことですが、旧約聖書が書かれているヘブル語では「殺す」という単語が23種類以上もありました。そしていろいろな場面によって単語が使い分けられています。戦争で殺すとか、裁判で死刑にする時に使われる単語が十戒では注意深く避けられているのです。そこで学者たちは十戒で「殺してはならない」といっているのは、個人が自分の判断で勝手に殺す「無法の殺人」が禁止されていると言っています。

聖書に出てくる最初の殺人は、兄のカインが弟のアベルを妬んだからでした。激しい怒りも人を殺させます。サムソンは怒り狂った時に30人を一挙に殺してしまいました。また欲望にかられて人を襲う時に起こります。強盗殺人がその典型でしょう。ですから心の中の妬みとか怒りや欲望のそそのかしが次第に強くなってきて、やがて人を殺す行為が生まれます。

そこでイエス・キリストは心の中の殺人の根を取り上げて、こうおっしゃいました。「昔から殺人は罪として裁かれた。しかし私は言う。裁かれるのは人間の外側の行為ばかりではない。内側の思いも神の厳しい調べと裁きの下にある。いつまでも怒り続けることは悪い。軽蔑の言葉を吐く者はなお悪い。不注意な話、意地の悪い話をして人の信用を破壊するのは最も悪い。執念深い怒り、人を軽蔑する傲慢さ、人の信用を傷つける行為は、心の中での隠れた殺人行為だ。厳しく裁かれるだろう。だから早く仲直りしなさい」(マタイ5:21～26)。

人を殺すことは最も重い罪です。これは誰でもが認める常識です。でも心の中の殺人の根が取り上げられ、隠れた殺人行為が問われるとなりますと、私たちは安閑としていられなくなります。ヨハネは言いました。「兄弟を憎む者は皆、人殺しです」(ヨハネの手紙一 3:15)。心の中で人を憎まなかった人間などいないでしょう。としますと私たちは皆、人殺しです。私など子どもの部屋の壁に「親父 死ね！」とマジックで書かれました。子ども達に心の中で殺人の罪を幾度も犯させてしまった悪い父親でした。人を殺すと言う場合、自分が人を憎んで心の中で人を殺すばかりでなく、人に憎しみを抱かせて罪を犯させるという二重の意味での人殺しがあるのですね。神さまの前に平伏して、罪の赦しを求めなければなりません。

[2]死刑廃止への動き

皆さんは「死刑」についてどうお考えになっていますか。シンガポールでは麻薬を10グラムか15グラム以上持っているところをつかまると、必ず死刑だそうです。以前は死刑が行なわれると新聞に写真入りで載りました。日本では2人以上人を殺すと、精神鑑定を参考にした上で大体死刑になります。

世界ではだんだん死刑制度を廃止する国が増えて来ました。1989年に死刑廃止条約が国連総会で採択された時、日本はアメリカ・中国などと反対しました。去年の6月全ヨーロッパ州評議会が日本やアメリカに対して「死刑廃止に向かったの動きがなければオブザーバーの資格を見直す」と

いう決議をしました。そこでアメリカでは、議会に死刑執行停止法案が提出されました。日本でも死刑廃止議員連盟が国会に提出する法案を検討し始めているそうです。

この議員連盟が去年の12月に死刑の執行をしないように法務大臣に申し入れた時、死刑を執行された人の顔の写真を示して「残虐な刑罰を禁じる憲法に違反する」と訴えたそうです。すると3年前に23歳の妻と11ヶ月の娘を18才の少年に殺された夫が、「私は仕事を終えて帰宅し、押し入れの奥で服をはぎ取られ、手首と口を粘着テープで縛られ、ゴミのように捨てられていた妻と対面した。死刑囚の最期の姿だけをもって、死刑が残虐であるか否かの議論をするのは愚かである。死刑の背後には、それ相応の罪がある」と新聞に反論を投稿していました。

殺される理由が全くないのに突然、理不尽にも殺されてしまった人の遺族にとっては、我慢ならない怒りがおありでしょう。罪の償いを強く求めるのは自然の情です。旧約聖書でも「命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足、やけどにはやけど、生傷には生傷、打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない」(出エジプト21:23～25、レビ24:19～20、申命19:21)と決められています。

これは世界最古のハムラビ法典(BC23世紀)からきたもので、報復を限定するあわれみに基づく法律だと言われています。復讐がどうしてもエスカレートしていきがちなので、復讐の範囲を限定した点で優れていますが、でも報復は認めています。日本でも明治以前、肉親が殺された場合は、理由が何であれ、報復することが武士には認められていました。いわゆる「あだ討ち」です。

殺人等という凶悪な犯罪から市民を守るために死刑という厳罰があった方が良く考える人が日本では79%(1999年9月調査)いるそうです。それにもかかわらず世界の動きは死刑廃止に向かって日本よりも二歩も三歩も先をいっています。これは人権意識の向上にもよるでしょうが、やはり根底に死刑は国家による殺人であり、人を殺すことはたとえ国家でもしてはいけないことだという思いが根底にあるからでしょう。

この場合、罪の償いを強く求める被害者側の思いがどう克服されるかが鍵となります。パウロはこう言っています。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。〈復讐はわたしのすること、わたしが報復すると主は言われる〉と書いてあります。〈あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる〉。悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ12:19～21)。

「命には命」と加害者が死刑になれば、それで償いになるのでしょうか。被害者の霊が慰められるのでしょうか。神さまはお怒りになっているのだから、神さまに復讐をお任せする。そして善をもって悪に勝とうとは、何という強い信仰でしょうか。でもやはりこの信仰に立つ以外に救いはないと思うのです。

[3]戦争という殺人について

日本で昨年死刑が確定した人が5人、死刑を執行された人は2人だったそうです。殺人事件は多いのに、死刑の判決を受ける人は案外少ないのだなと思いました。それに比べますと戦争によって殺される人の数は、また何と多いことでしょうか。

国家は国内の社会秩序を維持するために銃を帯びた警察力を持ち、犯罪者に死刑という殺人を行なうことが認められている。それと同様に国際間での秩序を保つために軍事力を持ち、戦争することも認められている。死刑を廃止したヨーロッパの諸国が軍隊も廃止したのであるかと言う反論もありました。

すると「国家が先ず死刑を廃止し、その上にたって次に戦争をなくしていくのだ」と論じた明治時代のジャーナリスト徳富蘇峰の言葉を紹介して、死刑廃止の流れを、戦争のない平和な世界をという人類の悲願の実現を目指す運動だとする意見もありました。

そうですね。奥さんと幼い娘を殺された方も、「私は死刑制度のない社会を実現するのではなく、死刑制度を必要としない社会の実現を目指すべきだと常づね考えている」と書いておられました。殺人などの凶悪犯罪が無くなれば、死刑制度は必要なくなります。そのために私たちは心の中に先ず芽生えてくる殺人の根を取り除くことに、真剣に取り組まなければなりません。

イエス・キリストは「一刻も早く仲直り(和解)しようとしなさい」(マタイ5:24~25)とおっしゃいました。パウロは「殺すな盗むな等どんな掟があっても、隣人を自分のように愛することに要約される」(ローマ13:9)と言いました。ただ悪を取り除こうとするのではなくて、相手を愛することによって隠れた殺人に打ち勝っていくのです。

イエス・キリストは自分を十字架につけた人々のために「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)と祈りつつ、彼らのために死んでいられました。このお方に永遠の命をもたらす愛があります。このお方を自分の救い主と信じる時に、その愛の命を頂くことができます。その愛を頂く時に私たちは初めて、復讐心に打ち勝つことができます。悪に対して、善をもって打ち勝っていけるのです。

国家が大変なお金を投じて最新の武器を備え、国民を守るためと称して他国と戦争をします。そして相手の国民だけでなく自分の国民も大勢殺してしまいます。このような殺人が一日も早くなくなる世界を何としても実現していきたいものです。国の中からも、人を殺し、自分も国家から死刑にされていくような犯罪者を、無くしていかなければなりません。

そのためには、隣人を自分のように愛していく愛をお互いに持つことが必要です。私たち全ての者の罪を清めて下さるために、イエス・キリストはご自分から進んで十字架について死んでくださいました。自分を殺す者がその罪で滅びないために、赦しを祈りながら死んでくださいました。敵のた

めに祈り、命を与えていく愛。これこそ本当の愛です。この愛をいただいた者が一人二人と増え、平和の祈りが広がっていくために、私たちは自分を捧げていきましょう。

[結]神の裁きを恐れて

この世界は偶然に出来たのではなく、神さまによって創造され、私たちは命を与えられた。しかも初めに神さまがお造りになった世界は非常に良いもので、神さまご自身も大変満足なさったほどだったというのが、聖書の信仰です。命は神さまから与えられたものです。神さまが創造された世界には死がありませんでした。

神さまは樂園を保つために一つだけルールをお決めになりました。それは善悪の判断だけは各自で勝手にしないで神さまに聞き従うこと。しかしアダムとエバは善悪の判断を下す知識の木の実を食べてしまいました。そして樂園を失ってしまいました。そして死が生まれたのです。世界に住む人間がそれぞれ自分勝手に正しい・悪いを決めるようになれば、秩序が混乱するのは当然です。日本の正義とアメリカの正義とが違ったので戦争になりました。

死は神さまの戒めに背いた人間の罪の結果です。神さまの裁きです。罪の溢れているこの世界に死が溢れているのは当然です。この現実にも身を置いている者として私たちは、世界が神さまの裁きの下にあることを心から恐れなければなりません。そして命は神さまの手の中にあるべきもの、神さまのみが命の生き死にをお決めになるお方であることを、いつもしっかり覚えておかなければなりません。

神さまは樂園を失ってしまったこの世界に秩序を維持するための上に立つ権威をお認めになりました。その代表的な権威が国家です。国家は秩序を維持するために警察力・軍事力を持つことを許されています。そして死刑や戦争を行なって人間を殺しています。しかし本来命は神さまの手にあるもの、生き死には神さまのみがお決めになるべきものであることを、上に立てられた権威はいつもしっかり覚えて、神さまに対する恐れを持ち続けなければなりません。

「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」とパウロは言いました。悪に対する神さまの怒りを覚え、恐れましょう。神さまの裁きは死を含みます。善悪についての自分勝手な判断が樂園を破壊しました。神さまの戒めにはすべて服従しましょう。

「わたしが報復する」とおっしゃるお方に復讐をお任せしましょう。そして愛することで悪に打ち勝ちましょう。殺しあうことのない平和な世界、樂園の回復を目指して神さまに用いられる者になっていきましょう。